

平家物語木曾の最期確認テストその一 文章について後の間に答えなさい。

・今井四郎ただ一騎、五十騎ばかりが中へ駆け入り、鎧ふんばり立ち上がり、大音声あげて名のりけるは、・「日ごろは音にも聞きづらん、今は目にも見（たまふ）。木曾殿の御乳母子、今井四郎兼平、生年三十三にまかりなる。・さる者ありとは、鎌倉殿までも知るしめされたるらんぞ。・兼平討つて見参に入れよ。」とて、射残しある八筋の矢を、さしつめ引きつめさんざんに射る。・死生は知らず、やにはにかたき八騎射落とす。・そののち打ち物抜いて、あれに馳せ合ひ、これに馳せ合ひ、切つてまはるに、面を合はする者ぞ（なし）。・ぶんどりあまたしたりけり。・ただ「射とれや。」とて、中に取りこめ、雨の降るやうに（射る）けれども、鎧よけれ

ば裏かかず、あき間を射ねば手も負はず。  
・木曾殿はただ一騎、栗津の松原へ駆けたまふが、正月二十一日、入相ばかりのことなるに、薄氷は張つたりけり、・深田ありとも知らずして、馬をざつと打ち入れたれば、馬の頭も見え（す）けり。・あふれどもあふれども、打てども打てども、はたらかず。・今井が行方のおぼつかなさに、ふりあふぎたまへる内甲を、三浦の石田次郎頭にあててうつぶしたまへるところに、石田が郎等二人落ち合ひて、つひに木曾殿の首をば取つてんげり。・太刀の先に貫き、高くさし上げ、大音声をあげて、「この日ごろ日本国に聞こえさせたまひ（つ）木曾殿をば、三浦の石田次郎為久が討ちたてまつりたるぞや。」と名のりければ、・今井四郎、いくさしけるが、これを聞き、日本一の剛の者の自害する手本。」とて、・太刀の先を口に含み、馬よりさかさまに飛び落ち、貫かつてぞ失せにける。・さてこそ栗津のいくさはなかりけれ。

問一、文中の（ ）の語を適切な形に直して記しなさい。  
問二、| 部の読み方を現代仮名遣いでひらがなで記しなさい。  
問三、| 部（または| 部が含まれている単語）の終止形を記し、用言の場合は

その活用の行・種類を記し、助動詞の場合はその文法的意味を記しなさい。（助動詞の場合の文法的意味は次から選び記号で答えること。同じ記号は一度しか使えない。）

（ア）過去（イ）完了（ウ）使役（エ）受身（オ）尊敬  
（カ）打消（キ）断定（ク）伝聞推定（ケ）比況（コ）確述・強意

問四、□の「ば」のうち1つだけ用法が違うものがある。その「ば」のある文番号を記入しなさい。

問五、| 部の主語（動作の主体）は誰か、次から選び記号で答えなさい。

（ア）木曾殿（イ）今井四郎（ウ）石田次郎為久（エ）石田が郎等

問六、文番号・今井四郎は、この時点では何のために戦をしているか。簡潔に記しなさい。

問七、文番号・「見参に入れよ」誰に何を見せるのか。簡潔に記しなさい。

問八、文番号・「あき間を射ねば」の部分を現代語訳で「すき間を射たので」という意味内容に変更した場合、古文はどのように変えればよいか。古文作文をしなさい。

問九、文番号・「深田ありとも知らずして、馬をざつと打ち入れたれば」を次の現代語訳に従つて傍線注釈しなさい。

**深い田があるとも知らないで、馬をざつと討ち入れたので**

問十、文番号・「ふりあふぎたまへる内甲」・「たれをかばはんとてかいくさをもすべ

き」を現代語訳しなさい。・は何が言いたいのかはつきりわかるように補つて訳しなさい。

問十一、文番号・にある敬語を抜き出し、その終止形、敬語の種類を記しなさい。

問十二、文番号の「名乗り」は何のためにしているか、簡潔に記しなさい。

問十三、文番号・「東国」は今どの地方か、次から選び記号で答えなさい。

(ア) 東北

(イ) 関東

(ウ) 北陸

(エ) 東海

(オ) 近畿

(カ) 中國

1年 組 番名前

D/N

問十三	問十二	問十一	問十	九問	問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一					
			・	・				・		・ (なる) 活用形	・ (射) 活用形	・ (れ) 活用形	・ (あげ) 活用形	・ (あふれども)	・ 燈	・ ・	・ ・

深田ありとも知らずして、馬をざつと打ち入れたれば

抜き出し

終止形

敬語の種類